

「ドイツ家庭文庫」における図書提供システムと 「信念のきずな」のかかわりについて

竹岡, 健一
鹿児島大学

<https://doi.org/10.15017/26529>

出版情報：九州ドイツ文学. 26, pp.27-55, 2012-10-11. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：



「ドイツ家庭文庫」における図書提供システムと 「信念のきずな」のかかわりについて

竹 岡 健 一

はじめに

小論は、ドイツにおける初期の代表的なブッククラブである「ドイツ家庭文庫」¹⁾の図書提供システムを、同文庫が成立した1916年から戦前の活動の詳細が確認される1942年に至るまで網羅的に把握するとともに、そのシステムが同文庫と会員間の「信念のきずな」とどのようにかかわっていたのかを考察することによって、同文庫の愛国主義的・民族主義的な特性の一端を明らかにしようとするものである。そこで、以下、第1章から第3章までは、ドイツ家庭文庫の「主要シリーズ」、「贈り物」、「選択シリーズ」の提供システムを個別に考察し、第4章において、それらの結果を総括するとともに、同文庫における図書提供システムと「信念のきずな」とのかかわりを論じる。なお、ドイツ家庭文庫は、1916年に「ドイツ民族家庭文庫」として設立され、1923年に「ドイツ家庭文庫」へと改称されたが、小論では、特に区別する必要がある場合を除き、後者を総称として使用する。また、小論は、ドイツ家庭文庫の雑誌『ハンザ同盟の書物の使者』、『家庭文庫の使者』、『かまどの火』のほぼ全巻を主な資料としている。

第1章 「主要シリーズ」の提供システム

ドイツ家庭文庫で刊行された主な本をまとめた文献としては、1916年から1933年までの時期に関するものが2つ見られる。すなわち、アンドレアス・マイヤーによる「購入義務図書一覧」と、ベルナデッテ・ショルによる「年間シリーズ一覧」である。²⁾しかし、1923年から1942年にかけて同文庫より刊行された雑誌から得られる情報によれば、主な本すべてについて、一貫して購入が義務とされたり、「年間シリーズ」という名称が用いられたりしたわけではないため、そのようなまとめ方では、事実との食い違いが生じる。また、いずれの文献においても1933年までの本しか記録されていないのは、ドイツ家庭文庫の母体であるドイツ民族商業補助者連合がナチスの「ドイツ労働戦線」に併合されたこの年に、同文庫の活動も中止されたと考えられたためではないかと推察されるが、実際にはその後も継続されている。そうした事情を踏まえて、小論では、ドイツ家庭文庫における最も中心的な図書に対する名称として、『かまどの火』の1938年5号の記事「沢山の選択のための私たちの新刊——大きな前進！」において、「選択シリーズ」と対比して用いられている「主要シリーズ」³⁾という言葉を用いる。そして、1916年から1942年までに刊行された「主

要シリーズ」を一覧表としてまとめたのが、巻末の資料1である。同文庫の1929年から1941年の「主要シリーズ」の一部については、すでに拙論において日本語訳による一覧を提示しているが⁴⁾、資料1では、この分野に関心を持つゲルマニストへの情報提供を優先して、ドイツ語で記載した。

さてそこで、「主要シリーズ」の提供システムに目を向けると、1916年から1922年にかけての「ドイツ民族家庭文庫」の時期については、詳細は明らかではない。例えば、上記のショル、マイヤーともに、1916年と1917年に計17冊、1918年に7冊、1919年と1920年に計20冊、1921年に6冊、1922年に4冊、そして1923年に4冊の本が、「購入義務図書」または「年間シリーズ」として刊行されたとしているが、雑誌『かまどの火』の1931年11号の記事「ドイツ家庭文庫はどのようにしてできたのか」によれば、最初の「年間シリーズ」が刊行されたのは1918年であり、その6冊の図書は、ショルとマイヤーが1916年と1917年の最初の6冊に数えているものと同じなのである。⁵⁾ これに対し、同文庫の名称が「ドイツ家庭文庫」に改められた1923年以降は、各年次の「主要シリーズ」を正確に確認することができるが、それは主として、同年より刊行された同文庫の雑誌の中に詳しい記録が残されていることによる。⁶⁾ それによれば、1923年には当初「年間シリーズ」として6冊の本が予定されていたが、インフレの影響により、4冊しか刊行されなかった。⁷⁾ また、インフレの影響は「年間シリーズ」の価格にも及び、1年間のシリーズ全体の値段が、1918年から1920年までは60マルク、1921年は120マルクであったのに対し、1922年からは1冊ずつ個別の価格が設定され、1923年には、8月に刊行された第3巻が1冊だけで350マルクにまで上昇した。しかしその後、バビエルマルクからゴルトマルクへの移行と安定した通貨の発行に伴って、12月刊行の第4巻が2.8マルクとなっている。⁸⁾ なお、1923年には、本自体の価格の他に、会員登録料として、300ないし600バビエルマルクが求められた。⁹⁾ このようなドイツ家庭文庫の「主要シリーズ」の刊行が安定するのは、レンテンマルクの導入によって経済状況が落ち着きを見せた1924年からであるが、以後1942年前半までの状況を見渡すと、5つの時期に分けられる。

第1期は、1924年から1934年までである。この11年間は、「主要シリーズ」は「年間シリーズ」として毎年6冊刊行され、合計24マルクの価格で、2ヶ月に一度の間隔で提供された。ただし、1927年のみ7冊刊行されているが、最後の1冊は薄い本であり、「付録」¹⁰⁾とみなされている。また、この間、1926年まではすべての本が「購入義務図書」であったが、1927年からは、一部の本を「選択シリーズ」から選べるようになった。¹¹⁾ 具体的に「年間シリーズ」のどの本が交換可能となったのかに関しては、1928年については残念ながら未確認であるが、1927年については7冊のうち4冊が「購入義務図書」で、「付録」を除いた残り2冊を「選択シリーズ」から選ぶことができた。そして1929年については、「購入義務図書」は第1巻、第3巻、第6巻の3冊であり、残りの第2巻、第4巻、第5巻の3冊に関して「選択シリーズ」から代替りの本を選ぶことができ、さらに1930年からは、「購入義務図書」は第1巻と第2巻の2冊とされ、第3巻から第6巻までの4冊を「選択シリーズ」からも選べるようになった。¹²⁾ なお、1924年には1ゴルトマルクの会員登録料が

求められたが、1925年から廃止された。¹³⁾

第2期は、1935年から1938年までである。この4年間も、「主要シリーズ」は「年間シリーズ」として、価格は合計24マルクのまま提供されたが、数が毎年8冊となり、それ以前よりも2冊多くなった。『かまどの火』の1934年5号の記事「兵士」によれば、この変化は、その数年前から「主要シリーズ」に加えて無料で提供されてきた2点の「贈り物」を廃止し、その代わりに「主要シリーズ」自体の冊数を増やしたことによるものであり、こうした業績の改善が可能となったのは、ドイツ家庭文庫の会員数が1933年から1934年にかけて著しく増加したためであった。¹⁴⁾ また、冊数の増加にもかかわらず、「購入義務図書」は第1巻と第2巻の2冊のままに留まったため、「選択シリーズ」から代わりの本を選べる冊数は、第3巻から第8巻までの6冊へと増えた。¹⁵⁾ なお、本の配布の機会は従来通り2ヶ月に1回、つまり年間6回であったが、3回目と6回目に2冊の本が提供されることで、年間では8冊となった。

第3期は1939年前半である。この年より、「主要シリーズ」の刊行方法は大きく変更され、半年間の「提案シリーズ」として、前半に7冊、後半に7冊と分けて刊行され、年間では計14冊となることになった。ただし、そうすると、同じ24マルクの年会費で、受け取る本の数が6冊も増えるのかと思われるが、そうではない。この点については、当時の会員の間にも誤解が生じており、『かまどの火』の1938年6号の記事「説明のために！」において、次のように述べられている。

「1年間に14冊」という私たちの告知が、会員は月2マルクの会費で、1年間の配本としてこれまでの8冊に代えて14冊受け取ると理解されることがありました。

そうではありません！ 1月の会費は2マルクのまま、本も1年に8冊のままです。

私たちが14冊の新しい本のことを口にするとき、それは、1939年中に、私たちが実際に14冊の本を新刊書として発行し、会員に提案するからです。その提案は半年ごと、年に2回行われます。すべての購読者は、その半年の義務の巻に加えて、さらに3冊の本を（主な提案または選択シリーズから）選びます。したがって、半年間に提供される本の数は、4冊となります。新たに製作数が増やされることで、すべての購読者には、より大きな豊富さ、活発さ、多様性、そして2度の選択の可能性という利点があるのです。¹⁶⁾

要するに、半年ごとに刊行される7冊の図書から、会員は、希望に応じてそれぞれ4冊を選択するのであり、受け取る冊数は従来通り8冊に留まるが、自由選択の可能性が広がったところに、新たなシステムの利点があるのである。もう少し詳しく見てみると、各期の「提案シリーズ」のうち最初に刊行される本は「購入義務図書」としてすべての会員が購入せねばならないため、年間では「購入義務図書」が2冊、「選択シリーズ」からも選べる図書が6冊となり、この点は従来と変わらない。しかし、これまでは、「購入義務図書」以外の6冊について、その本を選ぶか、または「選択シリーズ」から選ぶという形で

あったのに対し、新しいシステムでは、自由に選べる6冊に対して、まず「提案シリーズ」の中に12冊の選択可能性が提供されているのである。したがって、半年ごとに見れば、会員は、まず「購入義務図書」以外の6冊の中から3冊を自由に選ぶことができ、その中に気に入った本がない場合は「選択シリーズ」の中からも選ぶことができるという二段構えになっているわけである。なお、「購入義務図書」以外の3冊について、定められた時期までに希望を出さなかった会員に対しては、ドイツ家庭文庫によって「提案シリーズ」の中から選ばれた本が提供された。¹⁷⁾ また、年間の冊数は変わらないため、配布の時期と冊数もこれまで通りであった。

第4期は、同じ1939年の後半から1941年までである。というのも、1939年前半から始まったシステムに、早くも半年後に新たな、そして重大な変更が加えられたためである。それは、「購入義務図書」を廃止し、半年ごとに購入する4冊を、「提案シリーズ」と「選択シリーズ」の中からまったく自由に選べるようになったことである。この点については、『かまどの火』の1939年2号の記事「1939年7月1日より完全自由選択！」において、次のように説明されている。

ドイツ家庭文庫は、その存在のすべての歳月において、善意の助言や時折の反抗に頓着せず、粘り強く固執した1つの特性を持っていました。つまり、1年間の経過の中で、すべての会員に購入される義務の巻の設定です。この義務の巻は、特に特定の詩人・作家や特定の作品を電撃的にかつきわめて広い根拠に基づいて普及させることが必要であった時代には、避け難い指導の要求の表れでした。私たちが義務の巻として刊行した本は、結局、常に私たちの民族の中で影響を及ぼすべきなんらかの戦いの本でした。ここでは次のものだけをあげます。つまり、ハンス・フリードリヒ・ブルック『ガイゼリッヒ国王』、ヴェルヘルム・プライヤー『トマハンス兄弟』、カール・ペノー・フォン・メヒョー『冒険』、ゴットフリート・ロータッカー『国境の村』、ハインツ・シュテグヴァイト『炉の中の青年』です。

1939年7月1日より義務の巻を断念し、会員に、1939年後半の半年の4巻を、主な提案または選択シリーズのリストから自らの判断で選ぶことを許すことへ移行するとき、もちろんそれは、私たちの指導の意志が断念されることを意味してはいません。それは従来通り存在し、私たちの仕事全体の中に常に見えるものとなるでしょう。義務の巻の廃止はむしろ、私たちのドイツの著作の完全な方向づけと、私たちに私たちの活動の枠をより広く張り渡すことを可能にする私たちの購読者数の喜ばしい増加の結果なのです。¹⁸⁾

こうして、ドイツ家庭文庫では、1939年後半期より、予め同文庫によって用意された本の枠内であるとはいえ、完全な自由選択の制度が実現された。また、この2年半の間は、半年ごとの「提案シリーズ」の冊数が8冊に増える一方、価格は年間24マルクのまま変わらなかった。

第5期は、1942年前半である。というのも、1939年後半から始まった状況が長続きせず、再度の変化を蒙り、「選択シリーズ」の刊行数と受け取る本の冊数がいずれも半減したのである。すなわち、半年毎に刊行される「提案シリーズ」は4冊となり、また「提案シリーズ」と「選択シリーズ」の中から購読者が受け取る冊数は2冊となった。年間では、「選択シリーズ」の刊行数は8冊、「提案シリーズ」と「選択シリーズ」の中から受け取る冊数は4冊である。こうして年間に受け取る冊数がそれまでの8冊から4冊に半減したことに伴い、価格も半分の12マルクに下げられるとともに、配布の機会もこれまでより減り、3ヶ月に1回となった。¹⁹⁾このような変更の理由について、『かまどの火』の1941年4号の記事「1941年回顧—1942年展望」では、次のように説明されている。

1942年は、会員に対して従来の通常の業績の半分しか保証せず、それとともに、売り上げも半分に減るという必要性を、例外なくすべてのブッククラブに課します。つまり、私たちは、1942年1月1日より、従来の8巻に代えて、4冊しか提供することが許されません。これは、実際にそれ以上の説明を必要としない、戦争に条件づけられた必要性です。²⁰⁾

つまり、再度のシステムの変更は、1939年に勃発した第二次世界大戦の影響によることであるが、実際、ドイツ家庭文庫では、すでに1940年半ばから図書の提供に支障が生じていた。例えば、1940年後半のための「提案シリーズ」のうち、同年8月に予定されていたアウグスト・ヴィンニヒの『素晴らしい世界』の刊行は12月に延期され、代わりにルートヴィヒ・テューゲルの『馬の音楽』の刊行が前倒しされている。²¹⁾そして、こうした混乱が時代の制約による不可避の事態であることについて、1941年2号の記事「呼びかけ！」において、次のように説明されている。

きわめて残念なことですが、すでに1940年の終わりに、需要の大きい私たちの本を時間通りに製作し、支障なく送付しようとしたさいに立ちふさがった困難は、今もまだ完全には取り除かれていません。私たちの引き渡し所と私たちの直接購読者の少なからぬ部分が、1941年の最初の送付を遅れて受け取りました。関連するすべての場所で、この規模で遅配が再発することを避けるための最大限の努力がなされるにもかかわらず、ごく近い将来においてもそれはまだ可能とはならないでしょう。

私たちが今日、もう一度詳細にこのことを話題にするのは、私たちが私たちの友人や会員やスタッフらに対し、次のことをはっきりさせたいという希望に駆られてのことです。それは、予定通り本が届かない、もしくは私たちの引き渡し所から引き渡されない場合、それが必ずしも人的労働力の不足や組織の欠陥に帰されるものではない、ということです。²²⁾

こうして、戦時下の物資の欠乏や輸送手段に生じた障害などとともに、ドイツ家庭文庫

の活動も徐々に縮小されたわけだが、1942年前半の「提案シリーズ」以後、「主要シリーズ」が引き続き刊行されたのかどうかは不明である。ドイツ家庭文庫の活動そのものはその後も継続され、1943年と1944年にも本が刊行されているが、それが新たな「提案シリーズ」なのかどうかはわからない。

なお、ドイツ家庭文庫の本は、初期には非会員にも2割程度高い値段で販売されていたが²³⁾、その後は、販売は会員に限定された。と同時に、それらは個別の値段を持っておらず、1年間に提供される6～8冊の本全体で24マルクと考えられていた。²⁴⁾ また、この冊数を越えてドイツ家庭文庫の本を購入したいと望む会員のために、遅くとも1929年以降、「追加シリーズ」が設けられていた。つまり、時期ごとに24マルクで購読可能であったのと同じ冊数の本を、追加の年会費を支払って、「選択シリーズ」から購読できるというものである。このシステムは、遅くとも1938年以降は、冊数まで自由に設定できるものとなり、3ヶ月分の会費6マルクに対して2冊を基準とし、2冊、4冊、6冊、8冊、あるいはそれを超えて10冊、16冊といった数で購読することも可能であった。²⁵⁾ ただし、この「追加シリーズ」についても、第二次世界大戦の勃発後、1941年10月1日から中止された。²⁶⁾

第2章 「贈り物」の提供システム

上記のように、「年間シリーズ」が6冊提供された1924年から1934年にかけての第1期のうち、1925年以降は、ドイツ家庭文庫からの「贈り物」として、本または芸術品が無料で、言い換えれば年間24マルクの枠内で提供された。このうち芸術品には、「クンストマップ」ないし「ビルダーマップ」と呼ばれる、絵をファイルしたものなどが含まれる。これらの「贈り物」の具体的な内容については、1925年から1928年については詳細は未確認であるが、1929年以降については、『かまどの火』の記事によって、1931年を除いて確認が可能であり、その結果をまとめたのが、巻末の資料2である。これらの「贈り物」の提供の仕方には、時期によって次のような3通りの変化が見られる。

まず、1925年から1931年までの7年間は、本または芸術品1点が「クリスマスの贈り物」として「年間シリーズ」の第6巻と併せて提供された。前記の記事「ドイツ家庭文庫はどのようにしてできたのか」によれば、最初のクリスマスの芸術品は「レンブラント暗闇の中の光 エッチングによる救世主の生 ヴィルヘルム・シュターペルの平易な説明のついた8枚の絵」²⁷⁾であった。また、1929年と1930年にはそれぞれ2冊の本が、1931年には9冊の本が用意され、ドイツ家庭文庫の選択により、それらのうち1冊が提供された。

次に、1932年と1933年の2年間は、「クリスマスの贈り物」に、「年間シリーズ」の第3巻と併せて送付される「夏の贈り物」が加わり、提供される本または芸術品の数が2点に増えた。また、用意される本または芸術品の数も増え、1932年には、「夏の贈り物」は5冊中1冊、「クリスマスの贈り物」は7冊中1冊、1933年には、「夏の贈り物」は14冊中1冊、「クリスマスの贈り物」は、3冊中1冊が、ドイツ家庭文庫の選択によって提供された。

最後に、1934年については、提供される「贈り物」の数は2点のままだが、「夏の贈り物」の名称が「休暇の贈り物」に変更され、そのさい用意された本は1冊のみであった。また、「クリスマスの贈り物」についても、用意された本は1冊だけだったが、購読者の希望に応じて、別な4冊の本のうちから1冊を選ぶことも可能であった。

ところで、こうして複数の本が用意された場合、受け取る側からすれば、自らの選択で希望するものを手に入れたいと考えるのは当然であろう。それに対し、ドイツ家庭文庫の側でも、すでに1930年の時点で、会員の希望に副うよう努めていたが²⁸⁾、特に1932年の「夏の贈り物」に関しては、『かまどの火』の同年4号の記事「私たちの夏の贈り物」に、次のような具体的な記述が見られる。

私たちの友人の少数は、特定の夏の贈り物が提供されることを望んでいます。私たちは、特定の夏の贈り物を割り当てる可能性が予定されていなかったにもかかわらず、この願いを留保つきで受け入れました。もしその連絡が夏の贈り物の印刷出版（3月中旬）よりも前に届いていれば、私たちは、この特別な願いを叶えるようあらゆる試みをするつもりです。²⁹⁾

なお、上記の通り、1935年以後は、この「贈り物」は廃止され、代わりにその2点分が「年間シリーズ」に取り込まれて、「年間シリーズ」の数が6冊から8冊に増えることになった。

第3章 「選択シリーズ」の提供システム

すでに言及したように、ドイツ家庭文庫では、1927年以降、「購入義務図書」の冊数が徐々に減少し、1939年後半からは、完全自由選択となった。そのさい、「購入義務図書」に代えて購入できる図書として用意されたのが、「選択シリーズ」であった。この「選択シリーズ」の内容については、1927年から1929年までに関しては、1927年と1929年のタイトル数がそれぞれ20と50であったことしか確認できない。³⁰⁾ それに対し、1930年から1942年前半については、『かまどの火』の記事から全タイトルを確認することが可能である。ただし、その数は非常に多く、逐一あげることはできないため、代わりに、雑誌の「選択シリーズ」紹介記事で用いられている項目ごとに、1年または半年のタイトル数をまとめたのが、表1である。³¹⁾ そのさい、例えば「小説と物語」のように一貫して用いられている項目もあれば、「芸術と音楽」と「芸術、音楽、文学」のように時期によって多少変化している項目もある。しかし、後者の場合は、項目のバリエーションをすべて列記して、該当する1年または半年のタイトル数をあげてあるので、それぞれの項目がどの時期に用いられていたのかを確認することも可能である。逆に、タイトル数が空欄になっている箇所は、当該の時期にその項目が用いられていないことを表している。また、一番左に記した番号は、各項目に含まれる本の内容に応じた分類を便宜的に示したものである。

表 1 : 「選択シリーズ」の項目とタイトル数

分類	項 目	1930年	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年 前半	1939年 後半	1940年 前半	1940年 後半	1941年 前半	1941年 後半	1942年 前半	合計	割合		
1	小説と物語	38	50	72	71	87	96	111	118	75	130	131	141	145	138	151	131	1807	54%		
	ドイツの古典					11	11		13	10	9	8	8	9	9	4	101				
	ドイツ古典文学							12												12	
2	詩と作品集	3	3	3														166	5%		
	日記と人生の記述	5	4	7	7	7	7	11	15	12	13	12	14	14	15	12	11			166	
3	芸術、音楽、文学				10	9	10	6	6	5	6	7	9	8	8	8	8	113	3%		
	芸術と音楽	5	4	4													13				
4	旅と冒険の本	6	5	7	10	10	9											269	8%		
	旅行と狩猟と冒険の本 技術			1				14	21	18	20	23	26	26	26	22	22				
5	科学、自然、および風土				4	7	11	10										114	3%		
	科学、自然、風土、故郷												9	7	5	4	57				
	自然と風土	6	6																	44	
6	北方的なもの	3	3	3														89	3%		
	ゲルマン先史				4	6	7	6	6	5	6			7	6	7	7			67	
7	先史																	227	7%		
	世界大戦				4	5	11	10	13	13	15	17	18	23	23	22	22			196	
8	世界大戦、政治、および歴史																	472	14%		
	政治、歴史、時代史、防衛科学	16	15					36	34	40	37	35					35			35	252
	政治、時代史、防衛科学												37							37	
	政治、歴史、防衛科学													38	39					77	
9	政治と歴史																	108	3%		
	政治、歴史、文化史	10			20	24		24									24			54	
	ナチスに関する本				14															14	
9	時代の本																	3365	100%		
	若者向けの本																			14	
	合 計	76	91	116	147	184	185	215	237	191	254	258	278	299	286	290	258	3365	100%		

※空欄は該当の項目が使用されていないことを示す。

いうまでもなく、各時期に用意された本はまったく異なるものではなく、部分的に重複している。したがって、各項目のタイトル数の合計、および分類ごとのタイトル数の合計は、あくまでも提供されたタイトルの延べ数であるが、差し当たりここでこの数値を基に考えれば、1930年から1942年までの13年間の「選択シリーズ」の年平均タイトル数は258となる。また、「選択シリーズ」が年ごとに提供された時期と半年ごとに提供された時期に分けて見れば、1930年から1938年までの9年間の年平均タイトル数は160、1939年前半から1942年前半までの7期の平均タイトル数は274となり、1939年以降のほうが圧倒的に多く、年を追うごとにタイトル数が増加していることがわかる。ここで、「選択シリーズ」の本のおおまかな内容を、表1の分類にしたがって示すと、次のようになる。

- 分類1：「年間シリーズ」と「贈り物」の既刊、それらの作家の他の作品、およびドイツの古典を含め、多数の小説、物語、および詩など。
- 分類2：政治家とその家族、作家、芸術家などの日記、自伝、回想、伝記、書簡集、講演集、名言集、遺稿など。
- 分類3：抒情詩集、詩論、文学論、画集、美術論、歌曲集、音楽論、文化史など。
- 分類4：ドイツ国内とヨーロッパのみならず、植民地を含めたアフリカ、北米、南米、インド、アジアなどの旅行記、旅行案内、狩猟体験記など。
- 分類5：科学技術、天文学、気象学、動物学、植物学、世界やドイツの地図、ドイツの風土、民俗学などに関する本。
- 分類6：エッダとサガ、それに古アイスランド、ノルマン人（バイキング）、先史時代のドイツなどの歴史に関する本。
- 分類7：第一次世界大戦における英雄的な戦いを描いた文学や従軍記、戦争捕虜や戦後ドイツにおける帰還兵の体験記、戦没者の手紙など。
- 分類8：第一次世界大戦の戦後処理やワイマール共和国を批判する本、反ユダヤ主義、民族主義、ナチズム、およびナチスの運動や政策についての本、ドイツの軍備や防衛政策に関する本など。なお、ナチズムに関連する本は、項目に明記されていない場合にも含まれていることがある。
- 分類9：童話や少年少女向けの物語。

これらの分類に含まれるタイトルの数が総タイトル数の中で占める割合を見ると、分類1が51%と圧倒的に多いが、このことは、「年間シリーズ」でも文学作品が多くを占めていることを考慮すればもっともなことである。ただし、そこに含まれる作品がドイツ家庭文庫の愛国主義的・民族主義的な思想を基準に選ばれていることは言うまでもない。そして、同様の意味で特に注目には値するのは、ゲルマン民族の歴史や第一次世界大戦に関する本、また大戦後の戦後処理やワイマール共和国を批判する本など、文学作品以外にもナチズムを含めた愛国主義と民族主義を擁護する本が多数含まれていることであり、分類6、7、8に含まれるタイトルの数は、総タイトル数の24%、すなわちほぼ4分の1に達して

いる。

ところで、「主要シリーズ」に代えて「選択シリーズ」の本を受け取ろうとする人は、1年ないし半年の初めに希望を伝えることが必要とされた。ドイツ家庭文庫が予めそれらの本の刊行数を見積もることができるようにするためである。³²⁾ また、2巻本以上の本または単独でもそれに相当する大きさの本の場合には、2冊かそれ以上の「主要シリーズ」と引き換えにすることが求められた。³³⁾ なお、「主要シリーズ」と同様、「選択シリーズ」に関しても、第二次世界大戦勃発後には、品切れにより引き渡しに支障が生じた。³⁴⁾

第4章 図書提供システムと「信念のきずな」のかかわり

ドイツ家庭文庫における以上のような図書提供システムについて、システムが安定した1924年から1942年前半までの状況を集約すると、表2のようになるが、第二次世界大戦の影響で規模が縮小された1942年前半を除いて、1924年から1941年までの18年間の推移を見たとき、1つのはっきりした傾向があることがわかる。それは、「購入義務図書」数の減少とそれに伴う「自由選択図書」の増加である。ドイツ家庭文庫においては、「主要シリーズ」の「購入義務」が、当初6冊であったのが次第に減少し、1939年後半より完全自由選択が実現されてゼロとなったのに対し、自由に選ぶことのできる本の冊数は、当初2冊であったのが8冊となり、またそのさいの選択肢は、「主要シリーズ」だけでも16冊にまで増え、これに「選択シリーズ」の多数のタイトルも加わることで、大幅に高まったのである。ワイマール共和国時代のブッククラブにおける本の購入義務と選択の可能性には、「完全義務」形式、「購入義務」と「選択制」の併用形式、購入義務なく自由に選べる「完全選択」形式の3種類が見られるが、一般的に、世界観的な背景を持たない、ないしは「営利的」なブッククラブほど、会員の維持・獲得のために、選択の可能性を大きく設定することが必要とされていた。³⁵⁾ だが、このように見ると、世界観的な背景を持つブッククラブの代表格であるドイツ家庭文庫においても、この点でのサービスを向上させる努力がなされていたことがわかる。

しかしその一方で、表2からは読み取れないものの、こうした選択の自由の拡大とは相反する傾向も、継続的に見られた。それは、ドイツ家庭文庫において、そうした自由選択が利用されないことが望まれ、とりわけ「選択シリーズ」から本が選ばれないことが期待されたことである。ここで、『かまどの火』の記事の中から、そのことを示す文章を5つ紹介する。³⁶⁾ 引用が長くなるが、ドイツ家庭文庫の言葉を通して具体的に確認する必要性を考慮したためである。なお、傍点による強調はいずれも引用者による。

シリーズの第3巻から第6巻までに対する自由な選択がこれまでのところごく小さな規模でしか要求されていないことを、私たちは、その都度の年間シリーズの構成となって表れる私たちの文学的指導への最良の称賛として評価します。(1931年1号の記事「1931年の選択書について」)³⁷⁾

表2：ドイツ家庭文庫における本の提供システム

	年会費	総受取数	「主要シリーズ」			「クリスマス」の贈り物		「夏（休暇）」の贈り物		「選択シリーズ」 タイトル数
			刊行数	購入義務数	選択可能数	刊行数	受取数	刊行数	受取数	
1924年	24	6	6	6						
1925年	24	7	6	6		1	1			
1926年	24	7	6	6		(1)	(1)			
1927年	24	7	7	4	2	(1)	(1)		20	
1928年	24	7	6	(3)	(3)	(1)	(1)		(40)	
1929年	24	7	6	3	3	2	1		50	
1930年	24	7	6	2	4	2	1		76	
1931年	24	7	6	2	4	9	1		91	
1932年	24	8	6	2	4	7	1	5	1	
1933年	24	8	6	2	4	3	1	14	1	
1934年	24	8	6	2	4	1+4	1	1	1	
1935年	24	8	8	2	6				199	
1936年	24	8	8	2	6				215	
1937年	24	8	8	2	6				237	
1938年	24	8	8	2	6				191	
1939年前半	24	4	7	1	3				254	
1939年後半		4	8	0	4				258	
1940年前半	24	4	8	0	4				278	
1940年後半		4	8	0	4				299	
1941年前半	24	4	8	0	4				286	
1941年後半		4	8	0	4				290	
1942年前半	6	2	4	0	2				258	

※カッコ内の数字は推定の値である。また、空欄は該当する本がないことを示す。

本来は年間シリーズの配布だけを行っていましたが、選択シリーズも絶えず増大し、数年前から100冊以上となり、そこからの選択が可能になっています。

特徴的なことですが、その利用は多くありません。投書において再三にわたって強調されるように、ドイツ家庭文庫では、書物への導きが望まれているからです。(1931年11号の記事「ドイツ家庭文庫はどのようにしてできたのか」)³⁸⁾

しかし私たちは、手紙か口頭で、また喜ばしい同意や批判的な評価や提案で、年間シリーズの編成にかかわった、私たちの共同体の仲間にも感謝します。意見と希望の交換の相互作用によって初めて、私たちが今やもう何年も前から、そして1936年により強められて、享受できる信頼関係が、繰り返し新たに生じましたし、生じているのです。私たちの指導を信頼し、シリーズの本を、選択シリーズが拡大されたにもかかわらず、変更なく購入する信奉者の数がこれほど大きかったことは、かつて一度もありませんでした。(1936年5号の記事「1937年の家庭文庫」)³⁹⁾

新しい年間シリーズは、私たちの指導に対する私たちの読書共同体の信頼を強めるでしょう。1937年には、私たちの友人たちの圧倒的多数が選択シリーズからの選択の権利を放棄しましたが、1938年には、その度合いがさらに高まるでしょう。(1937年5号の記事「1938年の年間シリーズ」)⁴⁰⁾

1939年の前半および後半の半年のために私たちの友人の嬉しいことに大多数が私たちに知らせた本の希望は、きわめて大きな部分が、その都度の半年の提案の本でした。私たちは、この結果によって、今年初めに私たちが半年間の提案シリーズを導入することで選んだ道の正しさが証明されたことを、嬉しく思います。ドイツ家庭文庫によってそのパンフレットと『かまどの火』によって繰り返し強調された2つの根本的事実が、私たちの友人たちによって十分正当に評価されたのです。

1. 1冊1冊念入りに選ばれた主な提案シリーズの8冊の本からの完全に自由な選択が、すべての要求を、私たちの贅沢に慣れた読者の要求をも、満たすことができる。

2. 選択シリーズの本に手をつけるのは、本当に例外的な場合にしか必要ない。それと同時に、私たちは、今日の前にある結果の中に、私たちによって繰り返し支持された文学的指導の原則に対する私たちの購読者の明確な信頼の証明を見ます。半年間のための提案シリーズの本はとてもよいので、この8冊の本の中から4冊に決めることが、すでに困難です。それでよいのです。(1939年3号の記事「信頼の証でもある!」)⁴¹⁾

さて、これらの引用からわかることは、大きく2つある。その1つは、ドイツ家庭文庫においては、自由選択の充実にもかかわらず、それが利用されないことが望まれ、とりわけ「選択シリーズ」から本が選ばれないことが期待されていたことである。つまり、「選択

シリーズ」の利用が少なければ少ないほど、同文庫による「主要シリーズ」の選択の適切さや「主要シリーズ」を通じた「文学的指導」に対する購読者の信頼が証明されると考えられたのである。そしてもう一つは、購読者の多数が、そのようなドイツ家庭文庫の期待に実際に従っていたことである。1931年にはまだ、「自由な選択」を利用する会員について、「ごく小さな規模」とか「多くありません」といった控え目な言い回しで表されていたが、1936年以降は「選択の権利を放棄」する者の数が、「これほど大きかったことは、かつて一度もありません」、「圧倒的多数」、「きわめて大きな部分」というように非常に自信に満ちた言葉で表現されているのである。では、なぜこうした自由選択の放棄が可能となったのかと問うたとき、これらの引用で繰り返されている特定の言葉が、ドイツ家庭文庫の特質を考える上でのキーワードとしての意味を持って浮かび上がってくる。すなわち、「指導」（「文学的指導」、「書物への導き」、「私たちの指導」）、「共同体」（「共同体の仲間」、「読書共同体」）、「信頼」（「信頼関係」、「信頼」、「信奉者」）などである。つまり、ドイツ家庭文庫は、ブッククラブと購読者の双方からなる「共同体」であり、購読者は、「主要シリーズ」として表れるブッククラブの「指導」に対してきわめて大きな「信頼」を置いていたわけである。そして、両者のこのような関係性は、ドイツ家庭文庫が単なる廉価書籍販売会社ではないことを強く窺わせる。では、それはいったい何なのか？ そのことをよく表しているのが、『家庭文庫の使者』の1928年10号の記事「信念の共同体としてのドイツ家庭文庫」の次のような件である。

ドイツ家庭文庫はそういった種類の最初の企業であっただけでなく、今日まで依然として、その努力を民族主義的な課題のために意図的に奉仕させた目標設定の点で唯一無二のものであります。加入が実行される前に、愛書家のもとで特定の前提がいかに強く満たされねばならないかを指摘することは、意味のある重要なことです。彼は単に契約で定められた権利と義務を引き受けたではありません。いえ、それ以上に、彼は、加入によって自らが全体の防衛の前線に属することを認識したのです。彼は、予め示された道に対応して、課された課題の作業と成就が進むよう個人的に関与するのだと、初めから確信していたのです。ドイツ家庭文庫とその読者との間のそのような意志の一致から、つまり共通の課題についての理解からのみ、信念のきずなが生じ得たのであり、それは両者を歳月とともにますます強く結びつけ、この問題のために喜んで犠牲を払う熱狂を引き起こしました。そのお蔭で、ドイツ家庭文庫は、目的にふさわしく、結果的に業績にも相応しい、不変の成長を遂げたのです。（傍点引用者）⁴²⁾

つまり、ドイツ家庭文庫とその購読者の関係は、通常の企業と顧客の間に見られるような商売上の関係を越えて、民族主義的な課題への奉仕というイデオロギー的な結びつきを成していた。ドイツ家庭文庫の会員になるということは、いわば、民族主義の普及という目的を達成するための結社への加入と、そのための献身的な尽力の誓いを意味したのである。こうしたブッククラブと購読者との間の「意志の一致」、すなわち「信念のきずな」が

あってこそ、ドイツ家庭文庫は、その会員に対して、次のように、本の購入にあたって私的な願望の実現よりも同文庫の愛国主義的・民族主義的な課題の発展を優先するよう要請することができたのである。

すべての契約による協定と同じように、ドイツ家庭文庫とその読者の関係にも、根底には、給付とそれに応じた反対給付の原理があります。しかしながら、ドイツ家庭文庫の読者には、「お金」に対して多くの「利益を得よう」という意図は、疑いなくほど遠いものであり、それとともに、彼にとっては、ドイツ家庭文庫の運命とさらなる発展への関与が、自らの個人的な人生の問題となりました。それどころか、彼にとって、ドイツ家庭文庫は、民族の独自性の維持の問題へと拡大したのです。したがって、自らの願い、例えば選択のためにできるだけ多くの本を提供してもらおうとか、装丁や仕上げについて出したごく個人的な、私的な要求にすべての本が合致するなどといったことは、問題にはなりません。その解決が自分自身の中に根拠づけられているこうした考慮は、「私が読みたい」ものではなく、「私が読まねばならない」ものを前面に押し出す問いの背後に退くのです。(傍点引用者)⁴³⁾

以上のように見たとき、ドイツ家庭文庫における図書提供システムは、その経済的な利点よりもむしろ、ブッククラブと会員の固い志操的な結束によって成り立っていたと結論づけることができ、ここに、同文庫の愛国主義的・民族主義的な特性の顕著な表れを見ることができるのである。ブッククラブ研究の碩学であるヘルムート・ヒラーは、すでに1968年の著作において、同時代の他のブッククラブに比してドイツ家庭文庫が持つ独自性について、「このブッククラブに集まった読者のもっぱら、愛国主義的な理念に満たされ、そのような種類の本を得たいという願望を自らすでに抱いていた人々であった。つまり、一方にある会員の期待や願望と、他方にあるドイツ民族家庭文庫の指導部の目標設定との大幅な一致が見られたのである」⁴⁴⁾と述べ、同文庫とその会員の間のイデオロギー的な一致を指摘しているが、小論の考察を通じて、こうした同文庫の独自性が、図書の提供システムという観点から具体的に裏づけられたと言えよう。

付 記

- (1) 小論は、科学研究費補助金の支給による研究（平成22～24年度、基盤研究（C）、研究代表者：竹岡健一、課題名：第一次世界大戦後のドイツにおける民族主義的読書共同体〈ドイツ家庭文庫〉とナチズム、課題番号：22520320）の成果の一部をまとめたものである。
- (2) ドイツ家庭文庫の雑誌については、平成22年9月6日から11日まで、ドイツ連邦共和国ライプツィヒ市の「ドイツ国立図書館」において調査を行った。貴重な蔵書の閲覧と複写を許可して下さった同図書館に対し、この場を借りて謝意を表する。

- (3) 『かまどの火』の収集にあたり、DAAD 給費留学生としてキール大学に留学されていた細川裕史氏のご協力を得た。記して感謝申し上げる。

注

- 1) ドイツ家庭文庫についての詳細は、次の拙論を参照。「雑誌『かまどの火』について — ナチズムと文学メディアのかかわりに関する考察の新たな手がかりとして」(日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第116号、2004年、61~68ページ)、『『ドイツ家庭文庫』について — ワイマール共和国時代から第三帝国時代における右翼商業職員への読書指導の一端』(研究同人誌『かいろす』第47号、2009年、84~104ページ)、「ドイツにおける『ブッククラブ』の歴史と研究の観点」(『かいろす』第49号、2011年、33~65ページ)、「ドイツ家庭文庫の雑誌の変遷と収録記事 — 1923年1号から1941年4号まで — 」(鹿児島大学言語文化論集『VERBA』第36号、2012年、85~130ページ)。
- 2) Vgl. Andreas Meyer: Die Verlagsfusion Langen-Müller. Zur Buchmarkt- und Kulturpolitik des Deutschnationalen Handlungsgehilfen-Verbands in der Endphase der Weimarer Republik. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung GmbH 1989, S. 237f.; Bernadette Scholl: Buchgemeinschaften in Deutschland 1918-1933. Engelsbach; Frankfurt am Main; Washington: Hänsel-Hohenhausen 1994, S. 294ff.
- 3) Hans Ivers: Unsere Neuerscheinungen für mehr Auswahl — ein großer Schritt vorwärts! In: Herdfeuer. 1938 Nr. 5, S. 204f., hier S. 204.
- 4) 拙論: 『『ドイツ家庭文庫』について — ワイマール共和国時代から第三帝国時代における右翼商業職員への読書指導の一端』、96~100ページ参照。
- 5) Emil Schneider: Wie die deutsche Hausbücherei wurde. In: Herdfeuer. 1931 Nr. 11, S. 2f., hier S. 2.
- 6) ドイツ家庭文庫の雑誌において、「年間シリーズ」および「夏(休暇)とクリスマスの贈り物」に言及されている記事の年次・巻数・ページ数は、次の通りである。Der hansische Bücherbote: 1924 Nr. 1/2, S. 8; 1925 Nr. 1, Rückseite des Titelblattes. Herdfeuer: 1929 Nr. 1, S. 13; 1929 Nr. 4, S. 61; 1929 Nr. 11, S. 175; 1929 Nr. 12, S. 190; 1930 Nr. 11, S. 172; 1931 Nr. 10, S. 16; 1931 Nr. 11, S. 2f., 10; 1932 Nr. 6, S. 310ff.; 1933 Nr. 2, S. 156f.; 1933 Nr. 5, S. 348f., 362f.; 1933 Nr. 6, S. 396; 1934 Nr. 5, S. 292f., 294ff.; 1935 Nr. 5, Rückseite des Titelblattes, 668ff.; 1936 Nr. 5, S. 274ff.; 1937 Nr. 5, S. 242ff.; 1938 Nr. 5, S. 204ff.; 1939 Nr. 2, S. 79ff.; 1939 Nr. 5, S. 211ff.; 1940 Nr. 2, S. 44ff.; 1940 Nr. 5, S. 156ff.; 1941 Nr. 2, S. 52ff.; 1941 Nr. 4, S. 154ff.
- 7) Vgl. Deutsche Hausbücherei. In: Der hansische Bücherbote. 1923 Nr. 1/2, S. 7; Deutsche Hausbücherei. In: Der hansische Bücherbote. 1924 Nr. 1/2, S. 8.
- 8) Vgl. Deutsche Hausbücherei. In: Der hansische Bücherbote. 1923 Nr. 9, S. 41; Emil

- Schneider: Wie die deutsche Hausbücherei wurde, a. a. O., S. 2f.; Ein Brief aus Elberfeld. In: Herdfeuer. 1931 Nr. 12, S. 15.
- 9) Vgl. Deutsche Hausbücherei. In: Der hansische Bücherbote. 1923 Nr. 1/2, S. 7; Vom Guten zum Besseren! In: Herdfeuer. 1935 Nr. 1, S. 460.
- 10) Aus deutschem Schrifttum. In: Der hansische Bücherbote. 1926 Nr. 12, S. 207.
- 11) Vgl. Ein Brief aus Elberfeld, a. a. O.
- 12) Vgl. Amtliche Mitteilungen der Deutschen Hausbücherei Hamburg. In: Herdfeuer 1929 Nr. 3, S. 48; Aus deutschem Schrifttum. In: Herdfeuer. 1929 Nr. 4, S. 61; Die neue erweiterte Auswahlreihe. In: Herdfeuer. 1929 Nr. 11, S. 176.
- 13) Vgl. Was bietet die Deutsche Hausbücherei? In: Der hansische Bücherbote. 1924 Nr. 5. Diese Seite hat keine Seitenangabe und folgt auf die Seite 52; Emil Schneider: Wie die deutsche Hausbücherei wurde, a. a. O., S. 3.
- 14) Vgl. Hans Ivers: Waffenträger. In: Herdfeuer. 1934 Nr. 5. S. 292f., hier S. 292.
- 15) Vgl. Mitteilungen an unsere Freunde. In: Herdfeuer. 1935 Nr. 2, S. 524ff., hier S. 524.
- 16) Zur Aufklärung! In: Herdfeuer. 1938 Nr. 6. S. 284.
- 17) Vgl. Die reichhaltige Auswahlreihe. In: Herdfeuer. 1938 Nr. 5, S. 213ff., hier S. 213; Mitteilungen an unsere Freunde. In: Herdfeuer. 1938 Nr. 5, S. 238f., hier S. 238.
- 18) Ab 1. Juli 1939 völlig freie Wahl! In: Herdfeuer. 1939 Nr. 2, S. 78.
- 19) Vgl. Hans Ivers: Rückblick 1941 — Ausblick 1942. In: Herdfeuer. 1941 Nr. 4, S. 145ff.; Mitteilungen an unsere Freunde. In: Herdfeuer. 1941 Nr. 4, S. 173.
- 20) Hans Ivers: Rückblick 1941 — Ausblick 1942, a. a. O., S. 146.
- 21) Verlegung von Lieferterminen. In: Herdfeuer. 1940 Nr. 4, S. 141.
- 22) Ein Appell! In: Herdfeuer. 1941 Nr. 2, S. 77 u. 79, hier S. 77.
- 23) Vgl. Deutsche Hausbücherei. In: Der hansische Bücherbote. 1923 Nr. 1/2, S. 7.
- 24) Vgl. Die Auswahlreihen der deutschen Hausbücherei, aus der gewählt werden kann. In: Herdfeuer. 1930 Nr. 11, S. 173; Die reichhaltige Auswahlreihe. In: Herdfeuer 1931 Nr. 11, S. 10ff., bes. S. 10; Unterhaltung mit dem Leser. In: Herdfeuer. 1934 Nr. 1, S. 60ff., bes. S. 62; Die reichhaltige Auswahlreihe. In: Herdfeuer 1934 Nr. 5, S. 310ff., bes. S. 310.
- 25) Vgl. Mitteilungen der deutschen Hausbücherei. In: Herdfeuer. 1929 Nr. 12, S. 192; Jetzt jeden Monat ein Buch! Jetzt brauchen Sie nicht mehr zu warten! In: Herdfeuer. 1930 Nr. 5, S. 80; Die Leistungssteigerungen der Deutschen Hausbücherei. In: Herdfeuer. 1931 Nr. 2, S. 32; Wer mehr will, braucht nicht zu fasten. In: Herdfeuer. 1931 Nr. 2, S. 32; Das muß man wissen. In: Herdfeuer. 1938 Nr. 1, S. 44; Brief an ein neues Hausbücherei-Mitglied! In: Herdfeuer. 1940 Nr. 1, S. 31f.; Hans Wolf: Was noch längst nicht alle Mitglieder wissen! In: Herdfeuer. 1940 Nr. 3, S. 108.
- 26) Hans Ivers: Rückblick 1941 — Ausblick 1942, a. a. O., S. 147.

- 27) Emil Schneider: Wie die deutsche Hausbücherei wurde, a. a. O.
- 28) Die neue Jahresreihe der Deutschen Hausbücherei. In: Herdfeuer. 1930 Nr. 11, S. 172.
- 29) Unsere Sommergaben. In: Herdfeuer. 1932 Nr. 4, S. 189.
- 30) Vgl. Ein Brief aus Elberfeld, a. a. O.; Aus deutschem Schrifttum. In: Herdfeuer. 1929 Nr. 4, S. 61.
- 31) 雑誌『かまどの火』において、「選択シリーズ」に言及されている記事の年次・巻数・ページ数は、次の通りである。Herdfeuer: 1929 Nr. 11, S. 176ff.; 1930 Nr. 11, S. 173ff.; 1931 Nr. 11, S. 10ff.; 1932 Nr. 6, S. 326ff.; 1933 Nr. 5, S. 366ff.; 1934 Nr. 5, S. 310ff.; 1935 Nr. 5, S. 684ff.; 1936 Nr. 5, S. 292ff.; 1937 Nr. 6, S. 297ff.; 1938 Nr. 5, S. 213ff.; 1939 Nr. 2, S. 88ff.; 1939 Nr. 5, S. 217ff.; 1940 Nr. 2, S. 49ff.; 1940 Nr. 5, S. 161ff.; 1941 Nr. 2, S. 57ff.; 1941 Nr. 4, S. 157.
- 32) Vgl. Betr. Auswahlbände der Reihe 1931. In: Herdfeuer. 1931 Nr. 1, S. 16; Eine Erleichterung in der Buchwahl. In: Herdfeuer. 1931 Nr. 5, S. 16; Von unserer Hausbücherei. In: Herdfeuer. 1933 Nr. 1, S. 78.
- 33) Die Auswahlreihen der deutschen Hausbücherei, aus der gewählt werden kann, a. a. O.; Die reichhaltige Auswahlreihe. In: Herdfeuer 1931 Nr. 11, S. 10ff., hier S. 10; Die reichhaltige Auswahlreihe. In: Herdfeuer 1934 Nr. 5, S. 310ff., hier S. 310.
- 34) Vgl. Auswahlbände. In: Herdfeuer. 1940 Nr. 3, S. 105. Dazu vgl. auch Hans Ivers: An der Schwelle des 25. Lebensjahres. In: Herdfeuer. 1940 Nr. 5, S. 145f.; Hans Ivers: Rückblick und Ausblick. 25 Jahre Deutsche Hausbücherei. In: Herdfeuer. 1941 Nr. 1, S. 1ff.; Ein Appell!, a. a. O.; Im nächsten Jahr für RM. 12, — noch 4 Bücher! In: Herdfeuer. 1941 Nr. 4, S. 173.
- 35) 拙論: 「ドイツにおける『ブッククラブ』の歴史と研究の観点」、52～54ページ参照。Dazu vgl. auch Helmut Hiller: Bücher billiger. Buch und Öffentlichkeit e. V., München [um 1968], S. 11.
- 36) ここに引用した以外にも、次の記事を参照。Neueinstellungen in die Auswahlreihe. In: Herdfeuer. 1936 Nr. 5, S. 316; 14 neue Bücher im Jahr! In: Herdfeuer. 1938 Nr. 5, S. 238; Brief an ein neues Hausbücherei-Mitglied!, a. a. O.
- 37) Betr. Auswahlbände der Reihe 1931, a. a. O.
- 38) Emil Schneider: Wie die deutsche Hausbücherei wurde, a. a. O.
- 39) Hans Ivers: Die Hausbücherei im Jahre 1937. In: Herdfeuer. 1936 Nr. 5, S. 274f., hier S. 274.
- 40) Hans Ivers: Jahresreihe 1938. In: Herdfeuer. 1937 Nr. 5, S. 242f., hier S. 243.
- 41) Auch ein Beweis des Vertrauens! In: Herdfeuer. 1939 Nr. 3, S. 137.
- 42) Richard Wulff: Die Deutsche Hausbücherei als Gesinnungsgemeinschaft. In: Der hausbücher-Bote. 1928 Nr. 10, S. 155f. hier S. 155.
- 43) Ebd., S. 156.

- 44) Helmut Hiller: Bücher billiger, a. a. O., S. 9f.

資料 1 : ドイツ家庭文庫の「主要シリーズ」一覧

(1) ドイツ民族家庭文庫の「主要シリーズ」

1916/17年の「年間シリーズ」

1. Tacitus: Germanien
2. Muthesius, Hermann: Der Deutsche nach dem Kriege
3. Münchhausen, Börris von: Balladen und Lieder
4. Mücke, Helmut von: Emden und Ayesha
5. Fock, Gorch: Seefahrt ist Not
6. Lersch, Heinrich: Herz! Aufglühe dein Blut
7. Coster, Charles De: Ulenspiegel
8. Jahrbuch 1917 für Deutschnationale Handlungsgehilfen
9. Raabe, Wilhelm: Der Hungerpastor
10. Bartels, Adolf: Geschichte der Deutschen Literatur
11. Lorenz, Ludwig: Heinrich von Treitschke in unserer Zeit
12. Dehn, Paul: England und die Presse
13. Knodt, Karl Ernst: Ein Denkmal für Paul Ernst Köhler
14. Vom deutschen Kaufmann im Kriege
15. Raabe, Wilhelm: Der Schudderump
16. Wilser, Ludwig: Deutsche Vorzeit
17. Jahrbuch 1918 für Deutschnationale Handlungsgehilfen

1918年の「年間シリーズ」

1. Jansen, Werner: Das Buch Treue
2. Vischer, Friedrich Theodor: Auch Einer
3. Friedrich des Grossen Werke
4. Freitag, Gustav: Ingo und das Nest der Zaunkönige
5. König, Eberhard: Wenn der alte Fritz gewußt hätte
6. Heinrich von Treitschke. Auswahl von Freytag-Loringhoven
7. Scheffel, Viktor: Ekkehard

1919/20年の「年間シリーズ」

1. Koschützki, Rudolf von: Quelle der Kraft
2. Jansen, Werner: Gudrun

3. Polenz, Wilhelm von: Der Büttnerbauer
4. Rosegger, Peter: Jacob der Letzte
5. Krieger, Hermann: Familie Hahnekamp
6. Krüger, Hermann Andreas: Gottfried Kämpfer
7. Eyth, Max: Hinter Pflug und Schraubstock
8. Lienhard, Friedrich: Oberlin
9. François, Louise von: Die letzte Reckenburgerin
10. Gotthelf, Jeremias: Uli der Knecht
11. Sperl, August: Die Söhne des Herrn Budiwoj
12. Mörike, Eduard: Auswahl
13. Müller-Guttenbrunn, Adam: Der große Schwabenzug
14. Kleist, Heinrich von: Michael Kohlhaas
15. Müller, Fritz: Kramer & Friemann.
16. Löns, Hermann: Der Werwolf
17. Seidel, Heinrich: Leberecht Hühnchen
18. Finckh, Ludwig: Der Rosendoktor
19. Lagerlöf, Selma: Gösta Berling
20. Keller, Gottfried: Sinngedichte

1921年の「年間シリーズ」

1. Petersen, Albert: Arnold Amsinck
2. Postl, Karl: Das Kajütenbuch
3. Müller, Fritz: Dreizehn Aktien
4. Meinhold, Wilhelm: Die Bernsteinhexe
5. Benninghoff, Ludwig: Romantikland
6. Kiesel, Otto Erich: Frau Marthe und ihr Sohn

1922年の「年間シリーズ」

1. Jansen, Werner: Firdusis Königsbuch
2. Kleibömer, Georg: Jürgens Berufung
3. Hoffmann, E. T. A.: Der Sandmann. Die Brautwahl
4. Parlow, Hans: Die Schwarzhäupter von Riga

(2) ドイツ家庭文庫の「主要シリーズ」

1923年の「年間シリーズ」

1. Fischer-Graz, Wilhelm: Aus der Tiefe

- 2 . Keller, Gottfried: Martin Salander
- 3 . Hesekei, Ludovica: Unterm Sparrenschild
- 4 . Benninghoff, Ludwig: Das freudige Herz

1924年の「年間シリーズ」

- 1 . Walter, Robert (Hg.): Ludwig Richters Tagebücher und Jahreshefte 1821-1883
- 2 . Gotthelf, Jeremias: Uli der Pächter
- 3 . Alexis, Willibald: Cabanis. 1. Band
- 4 . Raabe, Wilhelm: Das Odfeld
- 5 . Alexis, Willibald: Cabanis. 2. Band
- 6 . Petersen, Albert: Der junge Perthes

1925年の「年間シリーズ」

- 1 . François, Louise von: Die letzte Reckenburgerin
- 2 . Pfarre, Alfred: Probandus
- 3 . Petersen, Albert: Perthes der Mann
- 4 . Brosin, Marie: Aus dem Jugendlande einer alten Frau
- 5 . Strachwitz, Moritz Graf von: Der Fahnenträger
- 6 . Gerstenberg, Heinrich: Ernst Moritz Arndt. Sein Vermächtnis an uns

1926年の「年間シリーズ」

- 1 . Raabe, Wilhelm: Die Leute aus dem Walde
- 2 . Weidel, Karl: Deutsche Weltanschauung
- 3 . Prehn-Dewitz, Hans: Der letzte Hohenstaufe
- 4 . Gotthelf, Jeremias: Schwarze Spinne
- 5 . Brandt, Rolf: So sieht die Weltgeschichte aus
- 6 . Hebel, Johann Peter: Lumpengesindel

1927年の「年間シリーズ」

- 1 . Schröer, Gustav: Der Hohlofenbauer.
- 2 . Günther, Albrecht Erich: Kampf und Freundschaft
- 3 . Bartels, Adolf: Die Dithmarscher
- 4 . Kurz, Hermann: St. Urbans Krug und andere Erzählungen
- 5 . Raabe, Wilhelm: Hollunderblüte und andere Erzählungen
- 6 . Reepen, Hans: Kinder der Steppe
- 7 . Poeck, Wilhelm: Rungholtmenschen

1928年の「年間シリーズ」

1. Schrickel, Leonhard: Blut zu Blut
2. Diers, Marie: Der Herrgottschulze
3. Riehl, Wilhelm Heinrich: Der stumme Ratsherr
4. Steinkopf, Wilhelm: Ingeborg von der Linde
5. Bartels, Adolf: Dietrich Sebrandt
6. Schröer, Gustav: Sturm im Sichdichfür

1929年の「年間シリーズ」

1. Kolbenheyer, Erwin Guido: Das Lächeln der Penaten
2. Petersen, Albert: Der Junkernhof
3. Schäfer, Wilhelm: Ausgewählte Anekdoten
4. Griese, Friedrich: Alte Glocken
5. Wildermuth, Ottilie: Das humoristische Pfarrhaus und andere schwäbische Geschichten
6. Sohnrey, Heinrich: Fußstapfen am Meer

1930年の「年間シリーズ」

1. Handel-Mazzetti, Enrica von: Die arme Margret
2. Nebelthau, Otto: Die Stadt der Wolken und Winde
3. Rüttenauer, Benno: Alexander Schmälzle
4. Ernst, Paul: Der schmale Weg zum Glück
5. Brandt, Rolf: Das Wolgalied
6. Huch, Rudolf: Anno 1922

1931年の「年間シリーズ」

1. Vesper, Will: Das harte Geschlecht
2. Grimm, Hans: Der Ölsucher von Duala
3. Hegeler, Wilhelm: Das Wunder von Belair
4. Hesekeel, Ludovica: Templer und Johanniter
5. Schröer, Gustav: Land Not
6. Schwarzkopf, Nikolaus: Der schwarze Nikolaus

1932年の「年間シリーズ」

1. Steguweit, Heinz: Der Jüngling im Feuerofen
2. Schwabe, Toni: Der Ausbruch ins Grenzenlose
3. Wehner, Josef Magnus: Sieben vor Verdun
4. Euringer, Richard: Metallarbeiter Vonholt

- 5 . Strauß, Emil: Der nackte Mann
- 6 . Frank, Hans: Hol' über

1933年の「年間シリーズ」

- 1 . Beste, Konrad: Das heidnische Dorf
- 2 . Mechow, Karl Benno von: Das Abenteuer
- 3 . Thoma, Ludwig: Lustige Geschichten
- 4 . Keller, Gottfried: Das Sinngedicht
- 5 . Winnig, August: Der weite Weg
- 6 . Lagerlöf, Selma: Charlotte Löwensköld

1934年の「年間シリーズ」

- 1 . Kolbenheyer, Erwin Guido.: Meister Joachim Pausewang
- 2 . Tügel, Ludwig: Die große Veränderung
- 3 . Schmückle, Georg: Engel Hiltensperger
- 4 . Kleist, Heinrich von: Zucht und Freiheit
- 5 . Johst, Hanns: So gehen sie hin
- 6 . Jünger, Ernst: Stahlgewittern

1935年の「年間シリーズ」

- 1 . Blunck, Hans Friedrich: Die große Fahrt
- 2 . Steguweit, Heinz: Heilige Unrast
- 3 . Polenz, Wilhelm von: Der Büttnerbauer
- 4 . Euringer, Richard: Ludwigslegende
- 5 . Waggerl, Karl Heinrich: Brot
- 6 . Bartels, Adolf: Die Dithmarscher
- 7 . Lohmann, Heinz: SA räumt auf
- 8 . Gunnarsson, Gunnar: Die Eidbrüder

1936年の「年間シリーズ」

- 1 . Beste, Konrad: Gesine und die Bostelmänner
- 2 . Rothacker, Gottfried: Das Dorf an der Grenze
- 3 . Lagerlöf, Selma: Anna, das Mädchen aus Dalarna
- 4 . Winnig, August: Heimkehr
- 5 . Grabenhorst, Georg: Meroe
- 6 . Wehner, Josef Magnus: Stadt und Festung Belgerad
- 7 . Kutzleb, Hjalmar: Morgenlust in Schilda

8. Stehr, Hermann: Nathanael Maechler

1937年の「年間シリーズ」

1. Blunck, Hans Friedrich: König Geiserich
2. Pleyer, Wilhelm: Die Brüder Tommahans
3. Mechow, Karl Benno von: Vorsommer
4. Lissner, Ivar: Ein Mann hört den Herzschlag der Welt
5. Ponten, Josef: Volk am Morgenstrom
6. Augustiny, Waldemar: Die Fischer von Jarsholm
7. Jünger, Ernst: Afrikanische Spiele
8. Stahl, Hermann: Traum der Erde

1938年の「年間シリーズ」

1. Herse, Henrick: Die Schlacht der weißen Schiffe
2. Eckmann, Heinrich: Der Stein im Acker
3. Beumelburg, Werner: Mont Royal
4. Steguweit, Heinz: Die törichte Jungfrau
5. Bergengruen, Werner: Der Großtyrann und das Gericht
6. Busse, Hermann Eris: Die Leute von Burgstetten
7. Griese, Friedrich: Die Wagenburg
8. Meschendorfer, Adolf: Der Büffelbrunnen

1939年前半の「提案シリーズ」

1. Blunck, Hans Friedrich: Wolter von Plettenberg
2. Ring, Barbara: Petra
3. Lissner, Ivar: Menschen und Mächte am Pazifik
4. Grimm, Hans: Der Leutnant und der Hottentott
5. Schaffner, Jakob: Die Wanderfahrten des Johannes Schattenhold
6. Wehner, Josef Magnus: Struensee
7. Goltz, Joachim von der: Der Baum von Cléry

1939年後半の「提案シリーズ」

1. Volkmann, Erich Otto: Die roten Streifen
2. Frank, Walter: Händler und Soldaten
3. Hoffmann-Harnisch, Wolfgang: Wunderland Brasilien
4. Sander, Ulrich: Axel Horn
5. Schäfer, Wilhelm: Der Fabrikant Anton Beilharz und das Theresle

- 6 . Strauß, Emil: Kreuzungen
- 7 . Schistl-Bentlage, Margarete: Die Verlobten
- 8 . Gunn, Neil Miller: Frühflut

1940年前半の「提案シリーズ」

- 1 . Nebe, Boris: Abenteuer in den Anden
- 2 . Jakobs, Theodor: Die letzte Schlacht
- 3 . Bauer, Josef Martin: Das Haus am Fohlenmarkt
- 4 . Augustiny, Waldemar: Die Tochter Tromsees
- 5 . Streuvels, Stijn: Liebesspiel in Flandern
- 6 . Ziegler, Wilhelm: Volk ohne Führung
- 7 . Jelusich, Mirko: Der Ritter
- 8 . Thoma, Ludwig: Erinnerungen

1940年後半の「提案シリーズ」

- 1 . Bainville, Jacques: Frankreichs Kriegsziel
- 2 . Winnig, August: Wunderbare Welt
- 3 . Lützkendorf, Felix: Märzwind
- 4 . Zillich, Heinrich: Der Weizenstrauß
- 5 . Diesel, Eugen: Diesel
- 6 . Goltz, Joahim von der: Der Steinbruch
- 7 . Tügel, Ludwig: Pferdemusik
- 8 . Wehner, Josef Magnus: Die Hochzeitskuh

1941年前半の「提案シリーズ」

- 1 . Waggerl, Karl Heinrich: Mutter
- 2 . Lambert, Käte: Das Haus des Lebens
- 3 . Koll, Kilian: Die unsichtbare Fahne
- 4 . Nebelthau, Otto: Die Schauspielerin
- 5 . Dokumente des deutschen Sieges in Wort und Bild
- 6 . Brehm, Bruno: Auf Wiedersehn, Susanne
- 7 . Lersch, Heinrich: Zwischen Niederrhein und Akropolis
- 8 . Steguweit, Heinz: Ihr vielgeliebten Schätze

1941年後半の「提案シリーズ」

- 1 . Griese, Friedrich: Die Weißköpfe
- 2 . Schreiber, Ilse: Die Flucht ins Paradies

3. Pfeffer, Karl Heinz: England
4. Ernst, Paul: Jugenderinnerungen
5. Blunck, Hans Friedrich: Die Jägerin
6. Pegel, Walter: Das Fräulein auf dem Regenbogen
7. Vollmer, Walter: Die Pöttersleute
8. Mikeleitits, Edith: Die Königin

1942年前半の「提案シリーズ」

1. Planner-Petelin, Rose: Das heilige Band
2. Kutzleb, Hjalmar: Zeitgenosse Linsenbarth
3. Sievers, Wilhelm: Das Rosenwappen
4. Rothe, Carl: Olivia

資料2：ドイツ家庭文庫の「贈り物」一覧

1925年

クリスマスの贈り物

- Lemblant: Das Licht in der Finsternis. Ein Heilandsleben in Radierungen/ Acht Blätter mit einführendem Text von Wilhelm Stapel

1929年

クリスマスの贈り物

- Winnig, August: Die ewig grünende Tanne
- Jacques, Norbert: Reise nach Sumatra

1930年

クリスマスの贈り物

- Benninghof, Ludwig: Das freudige Herz
- Blunck, Hans Friedrich: Hein Hoyer

1931年

クリスマスの贈り物

- Freksa, Friedrich: Das wehrhafte Fräulein
- Zerser, Julius: Johannes—eine Faustlegende
- Golz, Joachim von der: Der Wein ist wahr—18 Geschichten
- Fouqué, Friedrich de la Motte: Undine und andere Erzählungen
- Die Blümlein des heiligen Franz von Assisi

- Brehm, Alfred: Schönste Tiergeschichten
- Wehner, Josef Magnus: Die Hochzeitskuh
- Freusberg, Elisabeth: Der fränkische Baron
- Richter, Ludwig: Tagebücher und Jahreshefte 1821-1883

1932年

夏の贈り物

- Klein, Fritz: Dreizehn Männer regieren Europa
- Masius, Hermann: Norddeutsche Landschaft
- Lorenz, Maria: Friedrich Lißmann
- Poeck, Wilhelm: Rungholtmenschen
- Engelhardt, Emil: Tat und Freiheit. Ein Fichtebuch

クリスマスの贈り物

- Ratzka, Clara: Frau Doldersum und ihre Töchter
- Ratzka, Clara: Die dunklen Ellernbroks
- Petersen, Albert: Virginia
- Petersen, Albert: Der Schwan vom Avon
- Kutzleb, Hjalmar: Die Hochwächter
- Benninghoff, Ludwig: Romantik-Land
- Gerstenberg, Heinrich: Ernst Moritz Arndt. Sein Vermächtnis an uns

1933年

夏の贈り物

- Gotthelf, Jeremias: Die schönsten Erzählungen
- Strindberg, August: Die schönsten historischen Erzählungen
- Hoffmann, E. T. A.: Die schönsten Erzählungen
- Kurz, Hermann: Erzählungen und Schwänke
- Petersen, Albert: Der junge Perthes
- Hegeler, Wilhelm: Der Zinsgroschen
- Tirpitz, Alfred von: Der Aufbau der deutschen Weltmacht
- Storm, Theodor: Das Schönste von Storm
- Steub, Ludwig: Die schönsten Erzählungen von Ludwig Steub
- Griese, Friedrich: Alte Glocken
- Rüttenauer, Benno: Alexander Schmälzle
- Barth, Hermann von: Einsame Bergfahrten
- Felder, Franz Michael: Aus meinem Leben

- Hehn, Viktor: Italienische Reise

クリスマスの贈り物

- Meyer, Conrad Ferdinand: Jürg Jenatsch
- François, Louise von: Erzählungen
- Diers, Marie: Der Herrgottschulze

1934年

休暇の贈り物

- Matrosen, Soldaten, Kameraden. Ein Bildbuch von der deutschen Marine

クリスマスの贈り物

- Wichert, Ernst: Litauische Geschichten

クリスマスの贈り物に代えて選択可能な本

- Müller, Fritz: Kramer & Friemann
- Gravlund, Thorkild: Am Ende der Welt
- Steub, Ludwig: Die schönsten Erzählungen
- Matrosen, Soldaten, Kameraden. Ein Bildbuch von der Reichsmarine.

Über die Beziehung zwischen dem Buchauslieferungssystem und der „gesinnungsmäßigen Bindung“ in der „Deutschen Hausbücherei“

Ken-ichi TAKEOKA

Dieser Aufsatz behandelt die Beziehung zwischen dem Buchauslieferungssystem und der „gesinnungsmäßigen Bindung“ in der frühen, typischen Buchgemeinschaft in Deutschland, der „Deutschen Hausbücherei“ (DHB), um einen Teil ihrer nationalistischen, völkischen Merkmale klarzumachen.

Im ersten Abschnitt wird die Hauptreihe, die je nach der Periode „Jahresreihe“ oder „Hauptvorschlagsreihe“ genannt wird, betrachtet. Dafür werden zunächst alle 208 Bücher, die von 1916 bis zur ersten Hälfte 1942 erschienen, aufgelistet. Die Anzahl der „Jahresreihen“ von 1916 bis 1923 beträgt 58. Aber ihre Auslieferung war unregelmäßig und läßt sich nicht so klar nachvollziehen. Dagegen wird das Auslieferungssystem nach 1924 aufgrund der Artikel der Zeitschrift der DHB genau betrachtet und in 5 Stufen eingeteilt.

(1) Von 1924 bis 1934 wurden jährlich 6 Bücher als „Jahresreihe“ ausgeliefert. Nur 1927 waren es 7 Bücher. Aber dabei ist der 7. Band nur eine „Zugabe“. Bis 1926 sind alle 6 Bücher Pflichtbände. Aber es sind 1927 vier, 1929 sind es drei, und ab 1930 nur zwei Bücher. Dementsprechend konnte man die übrigen drei bzw. vier Bücher aus der „Auswahlreihe“ frei wählen.

(2) Von 1935 bis 1938 wurden jährlich 8 Bücher, also 2 Bücher mehr als zuvor, als „Jahresreihe“ ausgeliefert. Das wurde dadurch verursacht, dass die später erwähnte „Sommer (Ferien)- und Weihnachtsgaben“ in die „Jahresreihe“ integriert wurden. Aber die Zahl der Pflichtbände veränderte sich nicht. So konnte man jetzt 6 Bücher aus der „Auswahlreihe“ frei wählen.

(3) 1939 erfuhr das Auslieferungssystem der Hauptreihe eine große Änderung. Es wurde geplant, dass in jeder Jahreshälfte 7 Bücher als „Hauptvorschlagsreihe“ herausgegeben werden. Der Pflichtband ist der erste Band in jeder Hälfte. So konnte man jetzt die übrigen 3 Bücher sowohl aus den übrigbleibenden 6 Büchern als auch aus der „Auswahlreihe“ frei wählen. So bekam der Bezieher größere Freiheit als zuvor.

(4) Aber dieses neue System bestand nur ein halbes Jahr. Schon in der zweiten Hälfte des Jahres 1939 begann ein ganz anderes System. Das heißt die „völlig freie Wahl“. Man konnte also halbjährlich 4 Bücher sowohl aus 8 Büchern der „Hauptvorschlagsreihe“ als auch aus der „Auswahlreihe“ ganz frei wählen.

(5) Das neue System währte wieder nur bis zur zweiten Hälfte des Jahres 1941. Es wurde geplant, dass ab 1942 jährlich nicht 16, sondern nur 8 Bücher als „Hauptvorschläge“ erscheinen. Man wählte also jährlich 4 Bücher aus diesen 8 Büchern oder aus der „Auswahlreihe“ frei. So verminderte sich die Zahl der Auslieferung um die Hälfte. Das wurde durch den Krieg verursacht. Stattdessen wurde

auch der Beitrag auf die Hälfte reduziert. Während er von 1924 bis 1941 jährlich 24 RM betrug, kostete er jetzt 12 RM. Aber jedenfalls die Auslieferung der Hauptreihe läßt sich von der zweiten Jahreshälfte 1942 an nicht bestätigen.

Im zweiten Abschnitt werden die „Weihnachtsgabe“ und die „Sommer- bzw. Feriengabe“ betrachtet, die außer der Hauptreihe nur in einer Periode im Rahmen des Jahresbeitrags ausgeliefert wurden, und zu der Bücher oder Kunstmappen gehörten. Genau gesagt wurde von 1925 bis 1934 eine „Weihnachtsgabe“ und von 1932 bis 1934 zugleich eine „Sommer- bzw. Feriengabe“ ausgeliefert. Die beiden Gaben wurden oft aus den vorbereiteten mehreren Büchern oder Kunstmappen nach Wahl der DHB ausgeliefert. Dabei wurde zugleich auch der Wunsch des Beziehers möglichst berücksichtigt. Wie oben erwähnt werden die beiden Gaben ab 1935 in die „Jahresreihe“ integriert.

Im dritten Abschnitt wird die „Auswahlreihe“ untersucht, die in der DHB spätestens 1927 gegründet wurde und die man statt eines Teils der Hauptreihe beziehen konnte. So wird hier aufgrund der Artikel der Zeitschrift der DHB eine Liste ihrer Kategorien und deren Titelzahlen von 1930 bis zur ersten Hälfte 1942 aufgestellt. Danach enthielt die „Auswahlreihe“ jährlich durchschnittlich 258 Titel. Inhaltlich werden darin 9 Kategorien bestätigt: (1) Literarische Werke, (2) Lebensbeschreibungen, (3) Ansichten über Kunst, Musik und Literatur, (4) Reise, Abenteuer und Jagd, (5) Wissenschaft, Technik, Natur und Landschaft, (6) Germanische Vorgeschichte, (7) Weltkrieg, (8) Politik, Geschichte, Zeitgeschichte und Wehrwissenschaft, (9) Jugendbuch. Darunter umfasste die erste Kategorie 51% und dazu gehören viele nationalistische, völkische Titel. Auch die sechste, siebte und achte Kategorie haben dieselbe Tendenz und umfassen zusammen 24%. Übrigens wurden nach dem Ausbruch des Zweiten Weltkriegs mehrere Titel der „Auswahlreihe“ unzulieferbar.

Im vierten Abschnitt wird schließlich die Beziehung zwischen dem Buchauslieferungssystem und der „gesinnungsmäßigen Bindung“ in der DHB untersucht. Aufgrund der Betrachtungen in den drei Abschnitten oben kann man in der Veränderung des Buchauslieferungssystems der DHB eine konsequente Eigentümlichkeit erkennen. Das heißt Verminderung der Pflichtbände und Vermehrung der freien Wahlmöglichkeit. Das ist interessant als ein Beispiel dafür, dass eine Buchgemeinschaft mit einer bestimmten weltanschaulichen Basis eine typisch „betriebswirtschaftliche“ Methode einführt. Aber dieses Ergebnis ist unerwarteterweise oberflächlich und entspricht nicht immer den Tatsachen. Es wurde in der DHB andererseits stark empfohlen und erwartet, dass man die freie Wahlmöglichkeit nicht benutzt, und dass man besonders aus der „Auswahlreihe“ kein Buch wählt, eben weil das „das Vertrauen unserer Lesegemeinschaft zu unserer Führung“ beweist. Den Artikeln der Zeitschrift der DHB nach verzichtete die Mehrheit der Bezieher auch tatsächlich auf das Recht der Wahl aus der „Auswahlreihe“. Sie waren ihrerseits nationalistisch und völkisch gesinnt und folgten freiwillig der literarischen Führung der DHB. Sie stellten also das Ziel ihrer Buchgemeinschaft über ihr privates Interesse. So kam das Buchauslieferungssystem der DHB durch diese „gesinnungsmäßige Bindung“ zwischen der Buchgemeinschaft und ihrer Bezieher zustande. Darin ist das nationalistische, völkische Charakteristikum der DHB deutlich zu erkennen.